


特定非営利活動法人 日本免疫学会
2019 年度 後期 Tadamitsu Kishimoto International Travel Award
研究発表報告書

申請者氏名	奥村元紀	会員番号	0035002	
申請者の所属・職名	筑波大学大学院 免疫制御医学研究室・博士課程 3 年			
出席会議名	The 18th Meeting of the Society for Natural Immunity (SNI)			
発表論文タイトル	Tumor-derived soluble CD155 interferes with DNAM-1 for Natural Killer cell-mediated tumor immunity			

実施結果:

私は、NK2019 にてポスター発表を行い、これから研究者として心得るべきことをいくつも学びました。

これまで自分が発表した国内学会では、同分野の研究者はほぼいない環境であったため、質疑応答にも全くプレッシャーがありませんでしたが、実際に同じ分子について研究している、著名な研究者と専門的により深い議論をすることができました。学会参加時にはすでに論文を投稿しており、Editor や Reviewer の感触も良く、Revise も順調に進んでいたため、自信をもって発表したつもりでしたが、彼らは「いい仕事だが予想通りの結果だ」という反応でした。定説や予想を覆すような発見でなければ、彼らのような研究者を興奮させることはできないと実感しました。また、具体的なデータについて良い意見も頂きました。私のプロジェクトでは、可溶性 CD155 が NK 細胞に発現する活性化受容体 DNAM-1 に強く結合し、膜型 CD155 と DNAM-1 の結合を阻害することで免疫抑制に働くことを示していますが、その親和性を示す値が異常に高く不思議に思っていました。しかし、「そのレベルの親和性でないと、膜型受容体同士の結合を阻害することはできないし、実際我々も高親和性を示す可溶性タンパクを解析しているから、非常に納得のできるデータだ」と、私の疑問を払拭するような意見を頂き、自分のデータに自信をもつことができました。

学会のシンポジウムでは、NK 細胞の研究の権威と呼ばれる研究者らの最新の研究内容を知ることができました。彼らのほとんどがヒト NK 細胞だけで十分な研究成果を上げていることが最も印象に残りました。近年、single cell RNA-seq やヒト化マウスの技術が発展し、これまでマウス細胞を用いてしかできなかった実験がダイレクトにヒト細胞で行われている現状は理解しているつもりでしたが、予想を大きく超えてきました。私が所属する研究室でもヒト化マウスを用いた実験は行われていますが、それをベースにはしておらず、その点で大きく遅れていると感じました。一方で、実験や議論の質に差はなく、むしろプレゼンスライドについては学生に真似させるべきでないレベルのものもいくつか見受けられました。また自分と同世代の学生による口頭発表にも驚かされました。私自身も日本免疫学会を含む様々な学会で発表賞を頂いていますが、彼らのプレゼン能力とは雲泥の差を感じました。彼らのようなプレゼンができるよう、慢心せず鍛錬したいと思いました。

世界トップレベルの研究者と直接ディスカッションできたこと・その分野の研究がどれだけ進んでいるか一気に知れたこと・英語でのプレゼンの改善点を見出せたこと・国外で開催される国際学会に初めて一人で参加したこと、これらは全て、基礎研究を志す私にとって有意義な経験になりました。費用を援助していただき感謝いたします。